



収穫時に飛び出すカエルを求めて群れるチュウヤギ



新たに開発された可動式の亀カエルスロープ

Story 03

滋賀県 高島市

水田農業

たかしま 生きものの田んぼプロジェクト

滋賀県北西部の高島市では、「たかしま生きものの田んぼ米」という名の米づくりが行われています。これは、高島市の呼びかけに応じた農家グループ・たかしま有機農業研究会による、地域豊かな自然との共生をテーマとした環境保全型のブランド米を生み出すための取り組みです。「農家の安心」「消費者の安心」「生きものの安心」の三つの安心の達成がモットーとされています。

それぞれの農家が耕作する水田を自分で観察し、そこに暮らす様々な生きものの中からお気に入りの「自慢の生きもの」を3種類以上設定、その生きものたちがより豊かに暮らせる環境づくりに取り組んでいます。フナやナマズが水路に来る田んぼではお手製の魚道を作り、カメがいる水路では陸



水路をあがってきたナマズ



希少種ナゴヤダルマガエル



水路で捕らえた魚を水田に放す「子供の手ひら魚道」

コメント

取り組みを進める中で、自分たちも自然の一員だと思えるようになりました。ただ、生物多様性の保全にだけ取り組んでも、やはり美味しくなければ継続的な支持をいただけません。ですからお米の品質管理、特に食味の向上にもとても気をつけています。

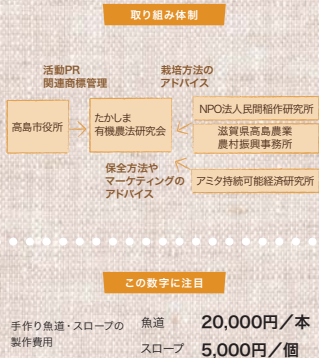
たかしま有機農業研究会
会長 梅村元成さん

対象となる生きものを 限定せず豊かさをアピール

共生の対象とする生きものを限定しないことで、逆に生きものの顔ぶれの豊かさをアピールすることができ、農家が自ら耕作する水田の生きものの物語を豊かに伝えられる素地が生まれています。

食味の改善により販路拡大、 取引単価も向上

米の栽培技術を高めることで、農薬（特に除草剤）を使用しなくとも比較的安定した収量を確保。品質（食味等）が高まったことにより、販路拡大や取引単価の向上を達成でき、農家の意欲向上につながっています。



この数字に注目

手作り魚道・スロープの製作費用	魚道	20,000円/本
	スロープ	5,000円/個



ロゴマーク



米袋

高島市農林水産振興課 TEL 0740-25-8511 (高島市産業循環政策部農林水産振興課)
E-MAIL info@ikimonotanbo.jp (たかしま有機農業研究会) WEB http://www.ikimonotanbo.jp/ (たかしま有機農業研究会)

Story 02

兵庫県 豊岡市

水田農業



水田の上空を舞う野生コウノトリ

力を失ってしまったことがあると言われています。そこで豊岡市と兵庫県が連携し、農業をできるだけ使用しない稲作技術（「コウノトリ育む農法」）の普及や農家との協力体制の構築を進め、様々な生きものを水田で育むための取り組みを展開しています。具体的には、干しの実施時期を遅らせることでオタマジャクシな

どの成長を助けたり、水田で産卵するフナやナマズが水路から遡れるようにするための魚道を設置するなどです。また、協力農家には「コウノトリと共生する地域づくり」への想いを共有し



農家による合同勉強会



米袋

コメント

平成17年の放鳥以降、コウノトリが実際に豊地に来るようになり、多くの農家の意識が変わりました。自分の田んぼにも飛んできてほしいという想いから、コウノトリ育む農法に取り組み農家も増えて

コウノトリ育むお米生産部会
部会長 郷悦喜さん

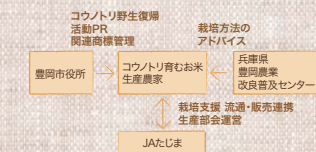
目的の明確化と 共感できる成果

「コウノトリの復活」という明確な目的があったこと、またコウノトリが実際に放鳥されたことで多くの地域関係者や消費者の間に「生きものが豊かに暮らせる環境づくり」に向けた共感が生まれました。

メディア活用やJAの 協力による参画しやすい 環境づくり

メディア等で紹介されたことによる知名度の高まりや、JAが販路を担ったことによる産物のブランド化促進により、多くの農家が参画しやすい状況ができてきました。

取り組み体制



この数字に注目

コウノトリ育むお米	生産部会会員数(豊岡市内)
51人・団体(平成18年)	153人・団体(平成21年)
コウノトリ育む農法	実施面積(豊岡市内)
41.7ha(平成17年)	212.3ha(平成21年)



氾濫後の休耕田で魚を捕る野生コウノトリ

豊岡市コウノトリ共生部コウノトリ共生課
TEL 0796-21-9017 E-MAIL kounotorikyousei@city.toyooka.lg.jp WEB http://www.city.toyooka.lg.jp/
JAたじま穀課 TEL 0796-24-2205 WEB http://www.ja-tajima.or.jp/



草原再生シールを貼った野菜



野草堆肥



採草の様子



阿蘇の草原（採草地）



水田にやってきたトキ



子どもたちの生きもの調査

Story 05

熊本県 阿蘇地域

畑作農業

阿蘇草原 再生シール



草原再生シール

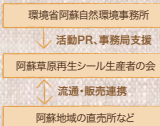
世界最大級のカルデラを擁する阿蘇地域では、広大な草原・原野を舞台に、草原再生と畑作農業の活性化の取り組みが進んでいます。人里の草原は古来、野焼きや採草（刈り干し切り）を繰り返してきまことで、人為的に維持されてきました。しかし現在は、管理放棄や植林に伴う森林化、農地化などにより、草原の縮小が進んでいます。阿蘇では今もなお、独特の草原生態系が形成され、多様な草花やチョウ類などが育まれています。しかし、畜産業の衰退や農家の高齢化、化学肥料の普及などにより野草の利用が減り、生態系の変化が危惧され始めています。

コメント

野草たい肥を使用すると、化学肥料に比べて土壌に微生物が多くなり養分を吸収しやすくなります。直売所では、シール付きの野菜目当てに訪れる方も徐々に増えてきました。今後は野菜の種類を増やして、販路も広げていきたいと考えています。

阿蘇草原再生シール生産者の会
会長 市原啓吉さん

取り組み体制



取り組みのポイント

ラベルを用いて活動を可視化

阿蘇草原再生シールを用いて、草原環境の保全に貢献する伝統的な農業活動を可視化しています。

原料調達と生態系保全を一体化

霞ヶ浦の事例(Story06)と同様、たい肥の原料調達と地域の生態系保全を一体で行うことができる取り組みとなっています。

阿蘇草原再生シール生産者の会事務局
(阿蘇自然環境事務所内)

TEL 0967-34-0254

WEB <http://www.aso-sougen.com/producer/index.html>

Story 06

茨城県 霞ヶ浦周辺

畑作農業

湖がよろこぶ 野菜たち



ラベル

国内第二の面積を誇る湖・霞ヶ浦では、水資源開発による影響や農畜産業の排水流入による富栄養化、外来魚の侵入などにより、水質の悪化と生物多様性の消失が深刻化。その課題解決を目指し、流域の漁師と農家が参画する循環型経済システムの構築が進みつつあります。

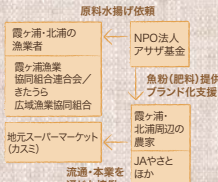
こうした取り組みでは産物の品質向上も大切ですが、その背景にある物語がより重要な場合があります。そこから活動推進のためにも、そういった物語を持つシンボルを設定すると良いでしょう。アサザ基金では、霞ヶ浦の再生や流域のシンボルとして、生きものを掲げ、関係者と連携しつつ、生物多様性の保全や持続的利用に向けた取り組みを進めています。

コメント

こうした取り組みでは産物の品質向上も大切ですが、その背景にある物語がより重要な場合があります。そこから活動推進のためにも、そういった物語を持つシンボルを設定すると良いでしょう。アサザ基金では、霞ヶ浦の再生や流域のシンボルとして、生きものを掲げ、関係者と連携しつつ、生物多様性の保全や持続的利用に向けた取り組みを進めています。

NPO法人アサザ基金
代表理事 飯島博さん

取り組み体制



取り組みのポイント

多様な主体が連携する 仕組みを構築

市民主体で霞ヶ浦の環境再生事業を展開する地域のNPO法人が取り組みを企画し、漁協や農協、魚粉加工業者、小売店など、多様な主体との関係づくりを進めながら活動をプロデュースしています。

NPO法人アサザ基金 TEL 029-871-7166

E-MAIL asaza@jcom.home.ne.jp

WEB <http://www.kasumigaura.net/asaza/gyaku/kanPWEB/>



(左から)
外来魚の水揚げ
魚粉
スーパーマーケットでの野菜販売の様子

Story 04

新潟県 佐渡市

水田農業

朱鷺と暮らす郷づくり

佐渡にはトキがいますが、生きものマークの取り組みは希少な生きものに限定されるものではないはず。希少生物がいない地域でも、農家自らが地域の良さや共生の物語を消費者や地域住民に伝えたいことが大切だと思います。

佐渡市役所 産業観光部 農業振興課
係長 渡辺竜五さん

コメント

新潟県佐渡市では、野生復帰を目指すトキと暮らす郷づくりに向けた取り組みが進んでいます。米の価格低迷や売れ残りの発生、農家の高齢化など、地域の主要産業である農業の閉塞感が高まる中、平成19年に佐渡市役所が中心となって「トキの餌場確保」と「農業水田稲作の活性化」をコンセプトとした「朱鷺と暮らす郷づくり」認証制度が発足しました。この制度は、冬期湛水や江・魚道・ピオトリブの設置などの「生きものを育む農法」を採用していること、エコファーマーの認定農家であること、特別栽培を行っていることなどを基準に、佐渡市が農家の取り組みを認証。認証のもとに栽培された米は、「朱鷺と暮らす郷づくり認証米」のラベルを貼って販売を行っています。

島内の農家、JA、行政の連携による取り組みが島外の流通業者や消費者の共感を呼び、平成17〜19年の3年間は佐渡全体の米の生産量のうち約2割程度(毎年5,000t程度)が売れ残っていたものが、平成20年は完売。また農家の収入も1俵(60kg)あたり1,000円程度向上し、平成21年も好調に販売が続いています。

取り組みのポイント

島全体で取り組み姿勢と 仕組みづくり

「佐渡全体としてトキの餌場をつくる」という考えのもと、より多くの農家が参加しやすいための仕組みづくりを進めています。

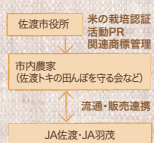
佐渡産コシヒカリとしての 認知度を向上

「佐渡にしかないコシヒカリづくり」を目指し、新潟県産ではなく、トキを育む佐渡産のコシヒカリとして認知度を高めることで、販路が着実に広がっています。

島内外での積極的な販路開拓

島内の旅館や学校給食との提携、島外からの修学旅行・農業体験学習の受け入れ、東京の「銀座ミツバチプロジェクト」との連携(米粉の菓子利用)など、取り組みの裾野を広げています。

取り組み体制



この数字に注目

取り組み参加農家数	255軒 (平成20年)	509軒 (平成21年)
認証圃場面積	427ha (平成20年)	866ha (平成21年)



米袋

佐渡市産業観光部 農業振興課

TEL 0259-63-5117 WEB <http://www.city.sado.niigata.jp/eco/info/rice/index.shtml>